

## 「長岡が育んだ哲学者・妖怪博士 井上円了」

新潟県立歴史博物館 田邊 幹

### 維新时期における長岡の教育と井上円了

#### 本論の目的

長岡における明治初頭～10年頃（円了が長岡にいたころ）の教育の様子を概観しつつ、そこで円了が見たもの、円了のその後に与えた影響について考察・紹介する。

#### （1）円了、漢学を学ぶ

- ・真宗僧侶としての教育：安政5年、井上円了、越後国長岡藩西組浦村の真宗大谷派慈光寺に生まれる。父円悟から真宗僧侶として教育を受ける。
- ・石黒忠憲に学ぶ：石黒忠憲、幕臣、佐久間象山に学ぶ。幕府の医学所を卒業、句読師。のち軍医総監。片貝村で塾を開く。
- ・木村鈍艘に学ぶ：木村鈍艘、長岡藩儒者、崇徳館都講。  
当時の情勢：戊辰戦争前後の混乱にともないそれまで幕府や藩に庇護されていた知識人たちが野に下り、地方名望家の庇護のもとに局地的に郷村の教育が充実する時期。  
⇒旧藩校流（武士流）の高度な教育が一部の郷村に波及する時期。

- 円了の様子 【資料1】襲常詩稿「慈鬘雑吟」  
【資料2】履歴書 西洋事情・学問勸など福沢の思想にも触れる

## (2) 円了、洋学(英学)を学ぶ

①明治6年5月 高山楽群社へ 栗原氏(丹波の人、詳細不明)より英語の初歩を「授業」

○円了の様子 【資料3】 襲常詩稿「夏日致高山洋学校策」  
前掲【資料2】 履歴書

②明治7年5月 新潟学校第一分校(長岡洋学校)へ

### i、長岡洋学校、概要

- ・戊辰戦争で敗れた長岡藩は、藩復興の第一に人材育成を掲げる(小林虎三郎の『興学私擬』、米・百俵)
- ・明治2年、国漢学校(藩営)を創設。洋学局・医学局などを併設
- ・明治4年、廃藩置県により廃校。明治5年、三島億二郎を学校掛として長岡洋学校を設立(柏崎県の認可)。旧長岡藩士で慶應義塾の学頭であった藤野善蔵を教師に招聘。

※当時、全国でもトップレベルの洋学校

厳格な藤野の教育方針、三島らの後援=福沢の理想形に近い

### ii、県令楠本正隆による洋学校の合併 - 新潟学校第一分校

- ・明治5年、楠本正隆、県令として赴任。
- ・楠本県令、英学校を県の管轄に移し、明治6年、新潟学校として整備。
- ・明治6年6月、柏崎県、新潟県に編入、県内の英語教育振興を実現。新潟学校を本校、長岡・柏崎・新発田・高田など県内各地の洋学校を分校として整理統合を図る

⇒三島・藤野は当然、の反対 官からの一方的な押しつけに対する在野からの反対

藤野、契約を更新せず東京へ。三島辞任。ほかの教員も長岡学校を去る。

※「風紀緩み」(小西信八回想)

「一時寂寞たる有様」(長岡学校沿革雑記)

→三島の復帰【資料4】

○円了にとっての高山楽群社、新潟学校第一分校

- ・明治6年5月~8月『高山楽群社』についての記載は『履歴書』の読書記録のみ
- ・明治7年5月 円了、新潟学校第一分校に入学 【資料5】

洋学への期待⇒学校の混乱を目の当たりに

※円了の履歴の記載

『履歴書・読書録』(屈蠖詩集) = 新潟学校第一分校・長岡洋学校

『博士の略歴』（「故井上博士の略歴及著書」『哲学会雑誌』第389号）＝長岡洋学校

『円了茶話』＝長岡洋学校

○新潟学校第一分校と円了のその後

- ・県令が永山盛輝に替わり、洋学教育に関する政策も変わり、新潟学校から独立仮学校、私立学校として開校
- ・円了、授業生に
- ・和同会を設立

まとめにかえて－円了の思想と長岡洋学校の混乱－

【仮説】

- ・高山楽群社は円了にとってあまり有意義とは認められなかったのでは？
- ・新潟学校第一分校時代、学校の混乱を目の当たりにしたのでは？
  - ＝藤野の長岡洋学校への憧れ 【資料6】
  - ＝官への強い反発の一因 【資料7】

官による教育への干渉の失敗を体験＝官より民

『独立自活』＝円了の教育理念のひとつ

【田邊先生プロフィール】

田邊 幹。1975年（昭和50年）宮城県生まれ。

東北大学大学院文学研究科博士課程前期修了。

2000年（平成12年）4月より新潟県立歴史博物館設立準備室。

2000年（平成12年）8月新潟県立歴史博物館開館に伴い、同館研究員（学芸員）。

同博物館で、資料の収集・整理・保管、調査研究、企画展の開催等にあたる。

担当した主な展覧会

- ・「絵葉書が語る近代」
- ・「博物館の怪談」
- ・「北前船」
- ・「戊辰戦争150年」等がある。

【資料1】 襲常詩稿

新田幸治・長谷川潤治・中村聡編訳

浦水井上田了漢詩集、『襲常詩稿』『詩冊』『屈蟻詩集』訳注

慈愛雜吟

浦里開贊集小兒

読書終日勉孜孜

午前共誦支那語

午後相伝英米詞

新施罰刑懲情慢

常窮道理教愚痴

早成内外国家学

要立文明開化基

会議 国史 漢書

蒙求

論語

孟子

國史略

史記

質問

日本外史

春秋

和語要領

万国新話

地球説略

博物新編

西洋事情

同 外編

同 二編

勸善訓蒙

輿地誌略

角毛偶語

世界国尽

万国新史

学問劬

小語綴

讀本

小地理書

第一読本

第二読本

○明治七甲成曆

新律綱領

改定律例

新論

董蒙教草

台湾紀聞

自由之理

西洋夜話

西洋衣食住

啓蒙知恵環

五洲紀事

万国奇談

西洋史記

史略

道理図解

西洋新書

同 二編

同 三編

同 四編

世界風俗往来

万国往来

東洋史略

窮理図解

窮理問答

洋書

万国史

大地理書

小米国史

大米国史

究理書

文典

英国史

仏国史

羅馬史

同氏

同氏

同氏

同氏

同氏

同氏

同氏

○自慶心二丙寅年至明治二己巳年

漢籍

合刻四書

論語正文

履歷書

○明治六癸酉西曆

獨見

輿地誌略

角毛偶語

世界国尽

万国新史

学問劬

小語綴

讀本

小地理書

第一読本

第二読本

第一読本

五月五日ヨリ愛蘭學校一入學シテ洋籍ヲ學ベリ

「バーレー」氏

「ミッテ」氏

「ライケンブス」氏

○明治八乙支曆

独見 圖書 漢書 訳書

元明史略 ○四月中

老子経 ○七月

東京新纂昌記

近世史略

立志編 中村敏太郎 ○三四月

国法汎論 ○十月ノ頃

近世紀聞

弁妄和解 安井忠軒先生著 ○七月

性理略論解 米人 丁蘭氏著 ○七月

英氏経済論 小幡篤次郎訳 ○九月初後

洋書受業ノ部

ヒンカル 米坂○「ワレン」 ○二月一日ヨリ

万国史 「ワレン」氏 ○二月中旬ヨリ

経済書 英坂○「チャンプル」氏 ○四月二十九日ヨリ

大経済書 米人「ウエランド」氏 ○六月中旬ヨリ

日耳曼史 「マルカム」氏 ○七月下旬ヨリ

究理書 「ワイルス」氏 ○十一月九日ヨリ

洋書独見ノ部

羅馬史 「スウェル」氏 ○八月

算学 自明治七年五月同八年五月末まで長岡校ニ於テ教授ラザシ

(6項目略)

以上八年中受教ノ分

【資料3】 襲常詩稿 前掲『甬水井上円了漢詩集』

夏日到高山洋学校作 夏日 高山洋学校に到るの作

一笠一蓑一布衣 一笠一蓑一布衣

負書朝暮共往帰 書を負いて朝暮共に往帰す

人言終日成何事 人は言う 終日何事をか成すと

我立講堂唱惠微 我は講堂に立ちて惠微を唱う

【資料4】 三島億二郎日記(明治8年) 抜萃

長岡市史編集委員会・近代史部会編 『市史双書No.17. 三島億二郎日記』

二十五日

午前出院、午後臥床、前日来ノ極寒ニ感冒し、悪寒頭痛等ニ困ル 此夕本県より左之達しあり

三島億二郎

新潟学校第一分校取締兼務申付候事

明治八年一月

学長

是前洋学校取締ハ戸長加藤氏兼勤也、同人願之通兼勤被免ト云、洋校之儀ハ一昨秋本縣ニ於テ論じたる廉も有之しに、其節渡されたる書面に我等之論する処、過慮ニ属する趣ニ而採用なし、其十二月藤野ハ前約を照し帰京、教師ハ本縣より派出されたり、但教員頻數之交代を初め万事不都合多し、一昨秋我等ニ被渡たる書面トハ大分差ある景況也、而今卒然此命あるも幸し難有者あり故ニ左之辭を以テ辞ス

今般新潟学校第一分校取締兼務被申付候旨御達之趣奉為承候、然処拙者儀近來老衰之上殊ニ多病ニ苦しみ、氣力漸く衰弱仕り候て何分繁劇之事務ニ堪兼候ニ付、不本意之儀ニ候得共、右御達之趣奉命仕兼依之右取締兼務御免被成下度奉願候、以上  
明治八年一月廿六日 三島億二郎印  
学長 二橋元長 殿

稲垣林四郎氏廿八日立ニテ、本縣行ニ付、其前夕同氏江此紙を托し本縣ニ出ス

二月 四日 午後風雪

午前出院、林四郎氏昨日新潟より帰來之由ニテ、戸長拜命を告ぐ、且ツ某托スル処、学校締之学長より更ニ其任、承之すへき之説談ありしと云ふ、帰路学校ニ過ル、校監ニ氏其奉命を請求して、種々談あり

十八日

十時出校、十一時後病院に臨む  
該日小島教員・仙田・稲垣ハ不參、生徒休業、午後四時半出校、夜ニ入教員三名、帰校之届あり、即ち校監局ニ会し其意を責む、三名辭謝之外他なし、而して小島氏微恙之為ニ明日を徊して、談話すべきに決ス、本富老人帰宅

二月十九日

九時病院ニ出、十一時澤氏を訪ふ、午後二時后小島氏を訪ふ、同氏前日之兼勤不都合なるを丁寧ニ論ズ、同氏罪を謝する云々、又学校之要用なる教育方之慎重して人ニ自ら重ンじ、自ら守る之精神を発達せしむる之要用急緊なる態方ニ談し、以来ハ員ニ此ニ注意すべきを話す

【資料5】 詩冊 前掲『甬水井上円了漢詩集』

始到長岡洋学校作

始めて長岡洋学校に到るの作

独到長岡市

独り来る 長岡の市

始遊洋学費

始めて遊ぶ 洋学費

講堂終日坐

講堂に終日坐し

頻誦惠微声

頻りに誦す 惠微声

【資料6】 詩冊 前掲『甬水井上円了漢詩集』

校中偶成

自到長岡三月余

長岡に到りてより三月余

三月有余学洋書

三月有余 洋書を学ぶ

愚身堪耻才情拙

愚身才情の拙なるを耻づるに堪えん

雖重時日寸功虚

時日を重ぬと雖も寸功虚し

【資料7】 詩冊 前掲『甬水井上円了漢詩集』

其二

秀菊却生幽谷裡

秀菊は却つて幽谷の裡に生じ

芳蘭還發僻山中

芳蘭は還つて僻山の中に發く

挾賢豈只搢紳士

賢を挾ぶに豈に只だ搢紳の士のみな

草莽由来起大雄

草莽は由来大雄より起く